



沿線の鉄道ファンが狙っているのは、こんな光景
(写真：小湊鐵道)



車窓には一面の菜の花と、たくさんの鉄道ファン

外側からは桜と菜の花に囲まれて走る小湊鐵道、内側からは一面の菜の花畑にずらりと

「あれ見て、すごい」。花への歓声とは少し雲囲気の違う声音に目を凝らすと、菜の花畑の向こう側には鉄道ファンらしき人々がずらり。駅周辺はもちろん、線路沿いのあちこちにも、カメラを構えた人の姿が続いている。沿線に鉄道ファンを見かけるのはよくあることだが、これほど多いのは珍しい。

片手に総立ちで窓にかじりつく。
「あれ見て、すごい」。花への歓声とは少し雲囲気の違う声音に目を凝らすと、菜の花畑の向こう側には鉄道ファンらしき人々がずらり。駅周辺はもちろん、線路沿いのあちこちにも、カメラを構えた人の姿が続いている。沿線に鉄道ファンを見かけるのはよくあることだが、これほど多いのは珍しい。

ふと気がつくくと、車窓には点々と菜の花。ふんわりとした春の日差しの下、のどかな景色が広がっている。この景色を見逃すのももったいないなあと思っている、「そろそろ飯給駅ですよ。ここから先は桜と菜の花がきれいですよ」と、すかさずアナウンスが入る。まったく車窓に目が向いていなかった参加者も、歌いながら視線を外へ。

歓声の先に見えるのは？

ながら私（筆者）には難しい。観客に徹して車内を見渡すと、参加者の9割以上は60〜70歳代と見られる女性たち。「何回参加したか忘れちゃうくらい、参加している」という人もいれば、初参加という人もいるはずだけれど、出発から30分、すっかり馴染んで区別がつかない。リピーターも初心者も、楽しそうに声を合わせる。

ながら私（筆者）には難しい。

観客に徹して車内を見渡すと、参加者の9割以上は60〜70歳代と見られる女性たち。

歌い足りないわけがない

並ぶ鉄道ファンの姿。内から外から、写真を撮り合い列車は進む。

小湊鐵道の終着駅、上総中野駅で折り返した歌声列車は、束の間の小休憩を挟んで後半戦へ。リズムに合わせた軽いストレッチやアコーディオンの徳永さんによる手話を交えた歌のコーナーなども織り交せて、参加者を飽きさせない。

列車が五井駅の1つ手前、上総村上駅を発すると、最後の曲「リンゴの唄」が始まる。この曲が終わると同時に五井駅に到着するのが通例だとか。そんなに上手く納まるものかと思っていたら、最後のフレーズを繰り返し、停車と同時にぴたりと終了。ホームに降りても、すぐには終わらず、お約束の「おまけ」が3曲。歌う姿は人目を引いて、向かいのJRのホームからも拍手が届く。

「おまけ」の最後に歌うのは、「今日の日はさようなら」。歌声は寂しさよりも、達成感にあふれて聴こえる。それもそのはず、往復約2時間半、出発前の「発声練習」に到着後の「おまけ」を含めたら、プログラムは3時間を軽く越える。歌い足りないわけがない。満足そうに「さようなら」を歌う顔を見れば、参加した日に次の回の予約をしていく人や、1年分の予約をすでに入れてくれる人がいるのもうなずける。

それでは、「今日の日はさようなら」、きつとすぐ来る「また会おう日」まで。



ヘッドマークの付いた車両が「歌声列車」



ホームに降りても歌い続ける



満席の車内には、昭和歌謡が響き渡る